

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その19)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載十九回目となるこのたびは、第二十四章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号:18K00329」による研究成果の一部である。

二十四章

エアリー卿は、自分がどれほどの賞賛の眼差しを浴びているのかまるで気づいていないらしいこの若い女性を、長いこと熱のこもった眼差しで見つめていた。

「レディー・ダウンハムにご紹介を願わねば」と彼はひとりごとを言った。そして、彼女があの高貴な表情で彼に向って微笑んでくれるだろうか、そして思ったことをそのまま口に出したいという彼女の願い通りに彼に接してくれるだろうか、彼に何と言葉をかけてくれるだろうかと考えていた。

この若い伯爵の願いを聞くと、レディー・ダウンハムは微笑んだ。

「私は、アール嬢に紹介してほしいという紳士方に取り巻かれておりますの。」と彼女は言った。「ですからあなたも普段とはあべこべに、大勢とともに動かなくてはなりませんわね、エアリー卿。」

あの完璧な口元からたった一言を聞くためなら、彼はどこへでも行ったであろう。レディー・ダウンハムはベアトリスの立っている場所へ彼を伴い、簡単に、だが優しい言葉で、彼を彼女に引き合わせた。

エアリー卿は常日頃、快活で楽し気に振る舞える人物として賞賛されていた。彼は、何をどのように話せばいいのかわかっていた。だがこのすばらしい瞳と視線が合うと、この若い伯爵は黙して赤くなつた。何か混乱しながら話そうとしたが無駄だった。彼は赤面し、ベアトリスは驚いて彼を見つめた——自分を熱心に見つめてくるこの男性が、物ごとに動じないことで知られた、かのエアリー卿なのだろうか？

とうとう彼は、この景観の素晴らしさと天気の良いさについて話そうとした。だが彼女の眼差しははつきりとこう問いかけていた。「他に話すことはないのかしら？」

優美さに魅了され、惹きつけられて、彼はぐずぐずと彼女のそばにとどまった。彼女はリリアンとレディー・ヘレナに話しかけていた。そして彼女など眼中にないかのように、周りからのお世辞に取り巻かれており、そのことがエアリー卿の自尊心をいたく傷つけた。彼は無視されることに慣れていなかった。

「花々やパーティーに厭きることはありませんか、ミス・アール？」と彼はついに言った。

「いいえ」とベアトリスは答えた。「お花に厭きるなんて——誰がそのような？そしてパーティーについて言えば、まだそれほど出席したことはありませんし、ますます好きになりますわ。」

「おそらくあなたの人生は私とは違って、そうしたものに巻き込まれてはいなかったのでしょうか。」

「花々には囲まれて参りましたが」と彼女は答えた。「パーティーはごいませんでした。何もかも目新しく楽しいですわ。」

「私もあなたのようにパーティーを楽しむたいものですわ。」と彼は言った。「私に教えてくださると良いのですが、ミス・アール」

彼女は明るく笑い、その澄んだ銀の鈴のような笑い声は、エアリー卿をいっそう彼女の虜にした。

彼は一番美しいボートを見つけると、このボートと一緒に湖を渡つてくれるようにベアトリスに頼み込んだ。彼は美しい一本のスィレンを彼女に手渡した。そして岸につくと、最も美しいベンチを探して彼女をそこに座らせた。

彼女の飾らない明るい振る舞いを彼は楽しんだ。こんな人物に彼は出会ったことがなかった。彼女は赤面することも気取ることもなく、彼の知り合ひだった多くの若い女性たちがそうだったように、半ば嬉しそうな感傷的な雰囲気彼の心遣いを受け入れたりしなかった。

彼女は彼がエアリー卿であることなど覚えてもないようで、彼を自分に惹きつけておこうとするような何の手段も弄さなかった。

この楽しい、天気の良い数時間は夢のようにあつという間に過ぎ去った。この一日がまだ終わらないずっと前から、この若い伯爵は運命の人に出会ったとつぶやいていた。そしてもし彼女を勝ちうるのに数年かかったとしても、この広い世界で彼女をおいて彼の妻はありえないため、あらゆる財を投じて好機を待とうと思った。

アール卿は、この若い高貴な紳士がおらずと訪れてきて彼の近づくことになることを請い、共に過ごす時間を楽しんでいた。レディー・ダウンハムのパーティーの後、彼は定期的にこの家を訪れた。レディー・ヘレナは彼を好意的に受け入れたが、彼女の孫のどちらがそのお目当てなのかはまるで分らなかつた。

この冷笑的な若い伯爵は、恋愛などという概念を笑い飛ばし、ベルグレイヴィアの花形の母親たちの半ばをがっかりさせてきたものだったが、とうとう自分がその恋愛の犠牲者になったことを自覚した。

彼は自信がなく、ロンドンで最も美しく才あふれる女性を勝ち得ることを望むすべもなかつた。彼女の前では彼はいつも臆病で、リアンを逃げ場にしていた。

エアリー卿は彼の華麗な館において、優美な伯母のレディー・ルコントの手を借りて大舞踏会を催すことになった。その招待状を受け取ったロンドンの社交界の人々は驚いた。

さまざまな憶測が飛び交ったが、何よりも興奮が大きかった。アール卿はこの招待状をレディー・ヘレナに見せて微笑んだ。

「もちろん母上はいらっしゃるでしょう。」と彼は言った。「この日は他に予定もありませんからね。うちの娘たちが最高に美しく見えるように気を配ってやってください。」

彼は娘たちをととても誇らしく思った——リアンは純白のシルクのドレスに彼女の好きな真珠をまとい、とてもきれいに愛らしく見えた！ベアトリスは、魅惑的で華やかな深紅に白いレースを雲のようにあしらったいでたちで女王のようだった。アール家代々のダイヤモンドが彼女の黒髪にきらめき、美しい白い首を取り巻いて、きれいな腕も幾重にも飾っていた。すばらしいザクロの花が胸に飾られたドレスを身に着け、彼女は白百合と深紅の美女桜のブーケを手にしていた。

この舞踏会の興奮は最高潮だった。ついに、しかるべき方向への第一歩だと思われた。最大の疑問は、エアリー卿が誰とともにこの舞踏会の幕を開けるのか、ということだった。すべての若い娘は固唾をのんで見守っていた。

疑問はすぐに解決した。ベアトリス・アールが部屋に入ってくるのと、エアリー卿はまっすぐに彼女に挨拶に行き、その手を取って、一曲目を彼と踊ってほしいと懇願した。この一つの行動にどれだけ多くの意味が含まれていたのか、彼女は知らなかつた。

この社交シーズンのうちでも最高のこの舞踏会の女王である彼女を眺めながら、彼は、彼女が自分に好意を持ってくれる可能性は皆無ではないのだろうか、彼女は自分を愛してくれるのだろうかと自問していた。この夕べ、彼の行為は初めて誇り高いベアトリス・アールの琴線にふれた。彼女はいたるところで、エアリー卿の富や才能、優れた人柄や思いやり、義侠心に富んだふるまいへの賞賛を耳にした。女性たちはこの若い主人役を、口を極めてほめたたえた。彼女は彼を眺め、そして初めて、彼の高貴で品位ある身のこなしや、長身で姿勢の良い立ち姿、はつきりとした貴族的な顔立ち——それは、美に関して言えば一般的な意味での美男ではなかったが、誠実さと名譽が自然ににじみ出ている顔であった——を意識した。

そして彼女は、エアリー卿がどんなに彼女の愛を求め、後に付き従い、彼女の姿を探し求めているかを知り、衝撃を受けた。彼女は人々から親し気な笑顔向けられ、彼の名とともに自分の名が人々の口端にのぼっていることに気づいた。

「ねえ、ミス・アール」とレディー・エヴァートンが言った。「あなたは偉業を達成されたわ——難攻不落の相手を攻め落とされたのですもの。ロンドン中の若い妙齡のレディーたちがエアリー卿に向かって微笑み、皆、失敗したわ。彼を足元にひざまずかせるために、あなたはいったいどんな魔法をお使いになったのかしら？」

「あの方が私の足元にひざまずいていらっしやるなんて存じませ

んでしたわ。」とベアトリスは答えた。「比喩的な表現をお好みでいらっしやいますのね、レディー・エヴァートン。」

「私が正しかったということがわかりますよ。」とレディー・エヴァートンは応じた。「あなたに最初にお祝いを申し上げたのが私だったということをお忘れなく。」

ベアトリスは、そんなことがあるだろうか、ぼんやりとだが嬉しく思った。彼女はもう一度エアリー卿を眺めた。確かに、こんな男性に愛されたらどんな女性でも誇りに思うだろう。彼が彼女の視線を捉え、彼女は赤くなつた。そしてすぐに彼は彼女のそばに近づいてきた。

「ミス・アール」と彼は熱心に話しかけた。「いつかあなたは、花々が好きだと仰っていましたね。まだ温室にいらしてないようでしたら、お連れしましょうか？」

彼女は静かに彼の差し伸べる腕を取り、すばらしい続き部屋を通り抜けて、さわやかな香気に満ちた温室に足を踏み入れた。

中央のきれいな泉の水の音が旋律を紡ぎ、色とりどりの花の中で灯りが青白い星のようにまたいた。

美しい植物に囲まれて、ベアトリスは戸惑わんばかりであった。

幾層にも重なった最上の花々——とても珍しい純白のヒースや燃え

るようなアザレア、赤ワインの水沫のような紫色のフクシアなど、とりどりの色彩と美しさで目もくらむばかりであった。最もベアトリスが魅了されたのは、遠く離れたインドの気候のような——繊細で香り高い花で、厚みのある緑の葉に守られた金の鈴のような花だった。感動のあまり、彼女はそこに立ちつくした。

「その花がお好きですか？」とエアリー卿が尋ねた。

「今まで目にした中で最も美しいもののひとつですわ。」と彼女は答えた。

その瞬間、彼はこの貴重な樹から最も美しい枝を取り集めた。彼女は彼が枝を折るのを見て驚いて声をあげた。

「いや、もしこのすべての花を一つにまとめあげることができたとしても、まだあなたにはふさわしいとは言えません。」

「彼女はこのいかにもフランス風なお世辞に微笑み、彼はこう続けた——「私はこれからあの樹を深く愛することになりましょう。」

「なぜですか？」と彼女は無意識に問いかけた。

「あの樹があなたを喜ばせたからです。」と彼は答えた。

彼らはこの美しい樹のそばに立っており、ベアトリスはその金の

鈴に指で触れた。この状況での何らかの魔法が彼女を感動させた。この求愛者が話していると、なぜこの泉がこんなにも美しい音楽を奏でるのか、なぜこの花々が倍も美しく見えるのか、彼女には分からなかった。彼女は愛されてきた。そして愛について多くの話も耳にきていた。だが、じつさいには愛がどのようなものなのか知らなかった。しばらくしてなぜ、エアリー卿と視線を合わせないよううに誇り高く美しい瞳を伏せたのか、なぜ自分が赤くなった後で青ざめたのか、なぜ彼の言葉が未知の不思議で美しい音楽のように響き——ずっと消えないのか、彼女には分からなかった。

「一枝を——たった一枝を——この楽しい時間の記念として私に頂戴できませんか。」と、しばらくの沈黙のうちにエアリー卿が言った。

彼女はその繊細な金の鈴の一枝を彼に手渡した。

「好奇心を満足させるために少しご容赦いただければ」と彼は言った。「他の誰かにあなたは花を与えたことはおありでしょうか？」

「いいえ。」と彼女は応じた。

「では倍も有難く存じます。」と彼は彼女にはっきりと言った。

この夕べ、エアリー卿はこの金の花を大切に持ち帰った。どんな宝と別れるときが来ようとも、この花だけは別だった。

だが彼の問いかけは突如、ベアトリスの気持ちをかき乱した。一瞬、彼女の想いはナッツフォードのあの海岸に戻った。現実はずっと遠くをさまざまと思い出した。その瞬間、悪寒が走ったように彼女は身震いし――エアリー卿がそれに気づいた。

「お寒いのですね」と彼は言った。「ここにあなたを立たせたままにしておくなんて、私は何と気が利かなかったことか！」彼は彼女の肩に高価なレースのショールを巻き、ベアトリスは我に返って、二人は舞踏室に戻った。だがエアリー卿はアール嬢のそばを離れなかった。

「舞踏会は楽しかったようだね、ベアトリス。」とアール嬢は娘たちが楽しい宵を過ごしたことを確信しているかのように言った。

「ええ、本当に、お父様。」と彼女は答えた。「人生で最も幸福な夜でした。」

「理由は分かっているよ」と、自分を見上げた顔にキスしながら彼は思った。「呪わしい秘密の恋愛沙汰などとは無縁のようだ。」

翌日、朝一番の客としてエアリー卿が訪れ、最後まで居座って、とうとうレディー・ヘレナが、今夜全員でオペラに行くことになっているので、そこでまたお目にかかりましょうと告げるまで帰らな

かったことに、アール嬢は驚かなかった。そしてレディー・ヘレナが彼と一緒に誘うべきかと考えていた頃、彼はその夜の彼のボックス席にレディー・モートンを招待していたことを後悔していた。

ベアトリスはその夜ずっと、彼女のそばを離れなかった誠実で高貴な顔を夢みていた。いつもはお世辞にまるで頓着しないにも関わらず、エアリー卿の語った言葉は一言たりとも忘れなかった。レディー・エヴァートンが言ったように、本当に彼は自分を好きなのだろうか？

その求愛者は、なぜ彼女が例の金色の花をそれほど気に入ったのか知りがたかった。じつさい、ずっと後になってその花は、彼女たちが大切にしていた小さな宝物のひとつになっていた。

エアリー卿が帰宅しようとして、アール嬢と母親だけがその場に残った時に、彼は母が今まで見たこともないような最も幸せそうな表情で母をふり向いた。

「もう決まりのようですね。」と彼は言った。「ベアトリスは立派な伯爵夫人に――リントン領のレディー・エアリーになるでしょう。彼はすばらしい若者で、イングランドで最高のカップルです。ああ、母上、私の愚行はもつと厳しく罰せられるべきだったのかも知れません。身分違いの結婚などありえません。」

「そうですね。」とレディー・アールは応じた。「ベアトリスには

何の心配もいりません。過ちなど犯すにはあまりにも誇り高い子ですからね。」(以下、次号)